

【論文】

聖イサアク大聖堂と二人の皇帝

——アレクサンドル一世とニコライ一世

池 本 今 日 子

旅人がフィンランド湾からペテルブルクに近づく時、その視線をまず捉えるのは聖イサアクのドームである。それは黄金の司教冠のように都市のシルエットから抜きん出ている。空が澄んで日が沈むとき、それは魔法のような効果を發揮する。この第一印象は正しい。人はその印象を持ち続けるであろう。^①

テオフィル・ゴージェイエは『ロシア旅行記』（一八六七年）^②の中でこう述べた。

聖イサアク大聖堂 Собор преподобного Исаакия

Дальнего (図1) は、ネヴァ川左岸の元老院広場

に面して、アレクサンドル一世治世（一八〇一〜二五年）^③の一八一八年に建設が始まり、ニコライ一世治世（一八二五〜五五年）の計画変更を経て、一八五八年に完成した。設計者はフランス人、オーギュスト・モンフェランである。ギリシャ十字を細長くしたような平面図と、ドーム、脇の四基の鐘楼を持



図1 聖イサアク大聖堂 2019年夏筆者撮影

ち、神殿風ボルチコがファサード四面を飾る。

この聖堂の建築様式についての評価は一定していない。Γ・ブテイコフとΓ・フヴォストヴァ、並びに、O・チエカノヴァとA・ロタチは後期古典主義と、イヴァン・フォミンはニコライ期の古典主義の一種と見做した。カロリーヌ・エラムは古典主義ないし新古典主義の項で扱うが、「どこことなく一貫性に欠ける」と述べた。ドミトリ・シヴィイトコフスキーによれば、ロシア後期新古典主義の代表的聖堂であり、当時ペテルブルクを席巻していたカリオ・ロッシとアンドレヤン・ザハロフの建築とは、構造も規模も異なる。一方、ウイリアム・ブラムフィールドは折衷主義に分類し、聖イサアク大聖堂はバシリカ風の内接十字型であり、そこに、新古典主義を含む様々な要素が融合した、と見做した。⁽⁴⁾

これらに対して、二つの時代ないし様式に及ぶと考える研究もある。セルゲイ・フォードフは、聖堂の様式は後期古典主義と初期歴史主義の二つの時代にわたると述べる。アレクサンドル一世下での初期の計画と後の完成作との相違も注目される。フォミンは、一八二五年の計

画と完成した聖堂の相違を指摘した。ジョージ・ハミルトンは、モンフェランの設計案の変化に、古典主義の減退と折衷主義の成長、アレクサンドル一世からニコライ一世への政治的変化の反映を見た。⁽⁵⁾

このような研究状況を踏まえ、本稿では、建築史の成果に基づき、聖イサアク大聖堂の複数の建築案を取り上げ、時代によるその変化を考察する。なお、ロシアのとりわけソ連時代の建築史では、一八世紀後半からアレクサンドル一世治世を古典主義期と呼ぶ。一方、近年の研究や西欧の研究は同時代の西欧と並んで新古典主義期と見做す。ここでは、エカテリーナ二世とアレクサンドル一世の時代について、新古典主義の用語を使用する。本稿はアレクサンドル一世とニコライ一世の政治の特徴を明らかにする試みの一環である。

一・ロシア新古典主義の教会建築

アレクサンドル一世が即位した当時のペテルブルクは、周辺の離宮を含めて、バロックと新古典主義の都市であった。一七世紀までのロシアとほとんど無縁であ



図2 三位一体聖堂（アレクサンドル＝ネフスキー大修道院）
 Рункевич С. Г. *Александро-Невская Лавра*. 1713-1913. СПб.: Синодальная типография, 1913. С. 717.

り、その点で正教会の教会建築も基本的に同様である。⁶⁾

フランスで興り一八世紀末から一九世紀初頭にヨーロッパを席卷した新古典主義は、バロックやロココを否定し、ローマの古代建築に回帰するところから始まった。それは単純さと厳格さへ向かい、パリのパンテオン（ジャック・ジェルメン・スフロによる旧サント＝ジュヌヴィエーヴ教会。一七五五～九二年）などが明晰な幾何学的建築を志向した。⁷⁾

エカテリーナ二世治世に建てられたアレクサンドル＝

ネフスキー大修道院の三位一体聖堂 *Троицкий собор Александро-Невской лавры*（一七七六～九〇年）（図2）はイヴァン・スターロフの設計である。ラテン十字のバシリカと、列柱を伴うロトundaに支えられた大きなドーム、やはりヨーロッパ風の二基の塔から成る。ロトundaと全体の図面において、パリのパンテオンとの類似性が指摘される。冬宮殿の対岸で鋭い尖塔を輝かせるペトロ＝パヴロ大聖堂 *Собор во имя первоверховных апостолов Петра и Павла*（一七一～三三年）は、ピョートル・バロック様式のオリジナルがエカテリーナ二世治世に大火に見舞われた後、新古典主義で再建された。鋭い尖塔を戴く鐘楼とバシリカの聖堂から成る。⁸⁾

ネフスキー大通りに面して列柱が大きく半円を描く堂々たるカザン大聖堂 *Казанский*



図3 カザン大聖堂（ペテルブルク）
 2019年夏筆者撮影



図4 旧ミハイロフスキー宮殿
2019年夏筆者撮影

кафедральный собор

(一八〇一〜一二年)

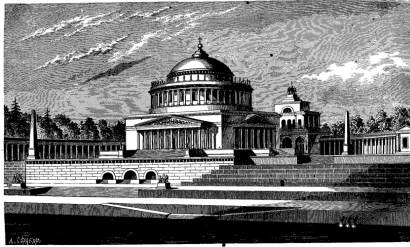
(図3)は、パーヴェル帝が計画し、アレクサンドル一世治世に建設された。アンドレイ・ヴォロニーヒンの設計による。ラテン十字の聖堂と、列柱を

伴うロトンダに支えられた大きなドームを持つ。パリのパンテオンと、ヴァチカンのサン・ピエトロ大聖堂(一七世紀)をモデルにしたと考えられている⁹⁾。

アレクサンドル一世治世下のペテルブルクでは、ザハロフが、ピョートル期の金色の鋭い尖塔を活かした印象的な海軍省(現ロシア海軍参謀本部)を建て(一八〇六〜二三年)、ロッシがミハイロフスキー宮殿(一八一九〜二五年、現ロシア美術館)(図4)と、宮殿広場の参謀本部(一八一九〜二八年)の建設を始めた。アレクサンドル一世は建築に高い関心を持ち、治世当初から、ペ

テルブルクにランドマークとなるような建物を計画した。その一方、彼は正教会の聖堂に当初ほとんど関心を示さなかった。彼の治世に建設が始まった正教会の聖堂は少ない¹⁰⁾。

ペテルブルクとその周辺で治世初期に彼の関心を最も惹いた聖堂建設は、クロンシュタットの聖アンドレイ大聖堂 Собор Андрея Первозванного(一八〇五〜一七年、一九三二年破壊)のものであろう。一七一七年にピョートル大帝が木造で建造し、老朽化したためエリザヴェータ帝が石造での再建を指示したが、建設されていなかった。一八〇五年六月二〇日にアレクサンドル一世の臨席のもとに起式が行われた。チャールズ・カメロン(後にザハロフ)の設計による。コリント式の列柱をもつ鼓胴部に支えられた大きなドームと、ラテン十字のバシリカ、鋭い尖塔を戴く鐘楼を持つ。三角形のペディメントを持つ神殿風ポルチコが三方面に形成された¹²⁾。モスクワでは、一九世紀初頭に、赤の広場のカザン大聖堂の拝廊と天幕型尖塔の鐘楼が廃され、西欧風の塔が建てられた¹³⁾。また、一八〇八年に、アレクサンドルの命を受け



ХРАМЪ ХРИСТА СПАСИТЕЛЯ ВЪ МОСКВѢ,
ПРОЕКТЪ АЛЕКСАНДРА ВИТЕБТА.

Детальныя чертёжы. С.-Петербургъ, 24 марта 1825 г.

1817 г.

Высота 5. 8. Главы, Владимирск. 20. 5.

図5 ヴイトベルク、救世主ハリストス大聖堂
案(1825年) Кириченко. Е. И. Храм Христа
спасителя в Москве. М., 1992. С. 28.

て、ロッシがクレムリンのヴォズネセンスキー修道院
Роженский монастырьの聖エカテリーナ聖堂（一
九二九年破壊）の建設を開始した。¹⁴⁾

一八一二年の戦争による大火後、モスクワの再建計画
がペテルブルク同様の新古典主義で進んでいた。アレク
サンドルは一八一二年一二月に、ロシアを災禍から救つ
たキリストへの感謝の印として聖堂を建設すると表明
し、一八一六年にアレクサンドル・ヴィトベルクの計画
を承認した。この救世主ハリストス大聖堂に彼は多大な

関心を払った。建
設場所はモスクワ
の外れ、旧デヴィ
チの野の先の雀ヶ
丘である。このロ
シアの伝統から切
り離された空間
に、モスクワの伝
統的中核部分とモ
スクワ川を見下ろ

して、丘の斜面を利用し、正教会としては異例な巨大さ
の聖堂を建設する計画であった。¹⁵⁾

ヴィトベルクの最終案（一八二五年、図5）は、大き
な扁平なドームを戴き、列柱に囲まれた円柱形の上層
と、神殿風ポルチコが四方面に張り出すギリシャ十字形
の中層、長方形の低層とから成る。厳格な幾何学性、対
称性、均衡を重視する新古典主義の聖堂である。一方、
「石に語らせる」象徴性を特徴とし、建築の構造から細
部に至るまでが、聖書の言葉に基づく意味を持った。正
教会の聖堂ながら、教派を越えた精神で神殿を創造する
ことを目指したものであり、アレクサンドル一世が推進
する普遍キリスト教的政策の象徴となるはずであった。¹⁶⁾

内務省国家経済及び公共建築部門は一八二四年に、
『石造教会建設のための平面図、正面図、側面図』を出
版した。この図面集の序文によれば、石造建築の知識と
建築技術を持つ建築家や石工が地方において不足してい
るため、聖堂が倒壊する例が多数あり、複数の主教と県
知事が、石造聖堂の模範図面と建築指針を求めた。これ
を受けて、一八三三年に内務大臣ヴィクトル・コチユベ

イが図面集の発行を提案し、アレクサンドル一世に認められた。図面集は、美術アカデミー建築部門長アンドレイ・ミハイロフと建築委員会のメンバー、ヨシフ・シヤルマン（ジョゼフ・シヤルマーニウ）¹⁷の監修のもと、ミハイロフの「短い手引き」とともに三一の教会案を掲載した。全て新古典主義の図面である。¹⁸

ニコライ一世の治世初期に、ペテルブルクに近衛連隊の二つの美しい聖堂がヴァシーリー・スターソフにより建設された。夏の庭園に近い全近衛連隊ブレオブラジエニエ大聖堂 Собор Преображения Господня всей гвардии（一八二七～二九年）は、一八二五年八月八日の火災後に再建が決まった。アレクサンドル一世の普遍キリスト教的政策はすでに破綻していた時期である。スターソフはニコライ治世の一八二六年から二七年に図面の作成に取り組み、アレクサンドルとニコライの末弟ミハイル・パヴロヴィチ大公が委員長を務める建設委員会が検討した結果、彼の設計に決まり、一八二七年八月二六日に起式が行われた。ドーム塔を五基戴く内接十字型だが、ギリシャ十字形も少し窺える。西側に神殿風ボルチコ

フアサードを備える。五基の丸屋根というロシア正教会の伝統的聖堂を意識した新古典主義であり、ロッシの建築と同様、黄色と白の配色を持つ端正な聖堂である。¹⁹

イズマイロフ連隊三位一体大聖堂 Собор Святой Живоначальной Троицы лейб-гвардии Измайловского полка（一八二八～三五）（図6）は、一八世紀末に首都の境界であったフォンタンカ川のすぐ外側に建つ。一八二四年一月一九日に洪水に見舞われ、翌年、アレクサンドル一世は修繕のために国庫から費用を拠出するように命じた。しかし、ニコライ一世は建て替

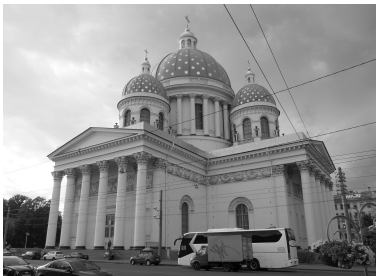


図6 イズマイロフ連隊三位一体大聖堂
2019年夏筆者撮影

えを決定し、一八二七年一月二二日にスターソフの設計図が承認された。²⁰ギリシャ十字形の平面と、四面に神殿風ボルチコを持つ。五基のドーム塔を持つが、中央ドームの列柱が取り巻くロンドン

は、スターロフのネフスキー大修道院三位一体聖堂、ヴォロニーヒンのカザン大聖堂、パリのパンテオンを彷彿とさせる。脇のドームが立方体の四隅ではなく十字架の腕の上に載り、中央と脇のドームによってピラミッド型を形成する。²¹ 全近衛連隊のブレオブラジェニエ大聖堂と同様に新古典主義であり、正教会らしいデザインを追求したものといえる。

この聖堂のドームは、スターソフの予定では元々緑色であった。しかし、一八三一年八月二六日にニコライ一世が、青色の地に金色の星をちりばめるように命じ、計画が変更された。²² ドームのこの配色は、一七世紀までのロシア教会の伝統を尊重した色彩である。このようなニコライ一世による建築への介入は他の聖堂ではより大きくなる。それを考察する前に、時代を少し遡る。

二・ 聖イサク大聖堂とアレクサンドル一世

ピョートル一世は一七〇三年にペテルブルクの建設を開始したが、一七一〇年に、海軍工廠を兼ねていた海軍本部の要塞の西側の門の前に、自分の誕生日（五月三〇

日）が祝日にあたる聖人ダルマチアのイサクを記念する教会を建立した。それが老朽化し、一七一七年八月六日に石造の新しい聖堂の起工式が行われた。しかし、弱い地盤のために放棄された。エカテリーナ二世治世の一七六八年に、聖イサク大聖堂は現在の場所に、アントニオ・リナルデイ²³の設計により、五基のドーム塔と西側に鐘楼を持つ聖堂として再建が始まった。²⁴ この作業も進まず、次帝パーヴェルはヴィンセント・ブレンナ²⁵に建設を進めるように依頼した。彼はエカテリーナ二世が認めたリナルデイの計画を小規模化し、ドーム塔を一基にした上、大理石ではなくレンガを用いた（一七九八―一八〇二年）。後年同聖堂の司祭セラフィーモフは同聖堂の冊子の中で、当時の聖堂の状況は「一般的な期待や趣味」と合致しておらず、周囲の建物とも調和していなかった、と記した。聖堂は下部が大理石、新たに作られた上部がレンガ造りという奇妙な組み合わせであった。²⁶ この大理石とレンガという取り合わせに、パーヴェルからアレクサンドル一世への急転を重ねる警句が広がっていたことが知られている。²⁷

セラフィーモフによれば、アレクサンドルは当初修繕を考えていたが、一八〇九年までに姿勢を変えた。一八〇五年のアウステルリッツ会戦、一八〇七年のフリードリントの戦いでの敗戦を経て、フランスとの講和及び同盟条約の締結に追い込まれ、彼の立場は危ういものとなっていたことが背景として考え得る。

一八〇九年に設計競技が行われた。ヴォロニーヒン、ザハロフ、カメロン、ジャコモ・クヴァレンギ、ルイジ・ルスカ、スターソフなどが招かれた。エカテリーナ二世時代のリナルデイの設計に則った部分を一部でも残すというアレクサンドルの指示に反して、全てが新築案であった。彼は全てを却下し、ナポレオン戦争後、一八一六年に、同年設置した建築工事業業委員会（ペテルブルク）の委員長で有能なエンジニアであるアグステイン・デ・バタンクールに、同委員会のメンバーに新たに案を提出させるように命じた。同委員会は、ロッシ、スターソフ、アントン・モデューイ（アントワーヌ・モーデューイ）、アンドレイ・ミハイロフ、エンジニアのピエール・ドミニク・バゼーヌなどから成る。バタンクールは

モンフェランに声をかけた。前述の司祭セラフィーモフは、一八一六年四月一〇日、復活祭の典礼（聖体礼儀）の最中に漆喰壁が聖歌隊の上に落ち、人々を震え上がらせたことが、アレクサンドルを建設に動かした、と記している。⁽³³⁾

モンフェランはフランスの建築家であり、ナポレオン下で軍務に就いていた。アレクサンドル一世は一八一四年三月三〇〜三十一日のパリ攻防戦の後に連合軍を率いパリに入城し、同地に滞在した。その際モンフェランは自分の図面集をアレクサンドルに献呈し、それが気に入られて、ロシアへ招かれた。一八一六年に來露し、中国風、インド風、ゴシック風、ビザンツ風、ルネサンス様式、古代及び近代のギリシャ様式で聖イサク大聖堂の建築案を作成し、バタンクール経由でアレクサンドルに提出した。建築工事業業委員会官房長官であったフィリップ・ヴィーゲリの反対にかかわらず、一八一六年二月二一日に宮廷建築家として認められた。⁽³⁶⁾

一八一七年にアレクサンドル一世は聖堂の設計を命じ、一八一八年二月二〇日にモンフェランの案を認め

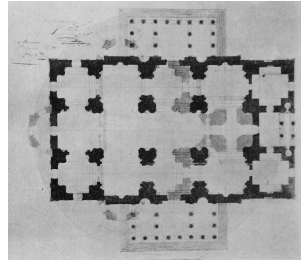


図7 モンフェラン、聖イサク大聖堂平面図(1818年) Никитин Н. П. Огюст Монферран. А., 1939. С. 31. (薄い線はポルチコの床を除き、旧聖堂のもの)

た。彼は、リナル
 デイの聖堂をでき
 だけ残すという
 アレクサンドルの
 要請に従った。⁽²⁷⁾ 彼
 は二案を示した
 が、その第一案と
 第二案の平面図の
 いずれも聖堂は長

方形であり、六本の中柱
 と、西側に鐘楼、北側と
 南側に神殿風ポルチコが
 付属する。より完成形に
 近い第二案(図7、8)



図8 同、聖イサク大聖堂外観図(1818年) Там же. С. 32.

では、鐘楼だけでなく、
 ポルチコも含めると平面
 図はギリシヤ十字形とな

る。ポルチコはコリント式の柱が三列並ぶ。中央の半球
 形のドームは巨大で、その鼓胴部は、中央ベイの中柱が

支えるアーチの上ではなく、十字の腕にあたる隣りのベ
 イにかかるトンネル・ヴォールトの上に載っていた。こ
 の点は後に問題となる。鼓胴部は独立したコリント式の
 一列の柱に囲まれる。長方形の四隅に中央ドーム塔と同
 じ形の小さい四基のドーム塔が載る。外装はレーヴェリ
 (タリン)の白い砂岩を用い、土台に花崗岩を用いるこ
 とを予定していた。⁽²⁸⁾ この第二案は、スターソフのプレオ
 ブラジエニエ大聖堂とある程度類似する。ローマのパン
 テオン(一一八―一二八年)のポルチコ、パリのパンテ
 オンのドームとポルチコ、クリストファー・レンのロン
 ドンのセント・ポール大聖堂(二六七五―一七二五年)
 のドームなどに似る。⁽²⁹⁾ ポルチコのペディメントが彫刻で
 埋まっている点はパリのパンテオンに類似している。新
 古典主義に分類しうる。

一八一八年二月二〇日にアレクサンドル一世は聖イサ
 アク大聖堂建設委員会を設置した。侍従長ニコライ・ゴ
 ロヴィンを委員長として、宗教・国民教育大臣アレクサ
 ンドル・ゴリツインと、ベタンクールをはじめ複数のエ
 ンジニア、さらに美術アカデミー総裁アレクセイ・オ

レーニン（在任一八一七～四三）が参加した。一八一九年七月二六日にはアレクサンドル一世と帝室の参列のもと、起工式が行われた。⁽⁴⁰⁾

モンフェランはエンジニアとしての訓練を受けておらず、多忙なベタンクルの不在時には不手際もあったようである。⁽⁴¹⁾同年、彼は汚職の疑いをかけられ、建設責任者を解任された。翌一八二〇年一月二二日にはモデューイが、モンフェランの設計上の欠点を美術アカデミーの会議で批判した。それを受けて、一八二一年六月一四日にアレクサンドル一世は、モデューイの指摘を検討するための特別委員会をレーニンのもとに設置するように命じた。八月一五日に設置され、バゼーヌ、ロツシ、アレクサンドル及びアンドレイ・ミハイロフ兄弟、アヴラム・メーリニコフ、スターソフなどが参加した。⁽⁴²⁾

一八二二年一月末に同委員会はモンフェランの設計に対して否定的な結論を出したが、すでに基礎部分の建設が始まっており、計画は中止されなかった。アレクサンドル一世は、委員会の他の建築家の案によってモンフェランの案を修正するように同委員会に命じた。四月二五

日、ミハイロフ兄弟、メーリニコフ、スターソフ、バゼーヌなど九名が案を提出した。⁽⁴³⁾

アレクサンドルはそのいずれも認めなかった。一八二四年二月一日に委員会で勅令が読み上げられたが、彼は、モンフェランの一八一八年案の「逸脱」、すなわち欠陥を正すため、新たな案を提出しないし選ぶように改めて委員会に命じた。その際、次の条件を付した。すでに彼が承認した一八一八年のモンフェランのファサードの外観を維持しつつ、「それに全体との必要な調和をもたらし、建築と上品さの原則に従わせるために、ファサードの様々な部分を……拡大ないし縮小させる。とりわけ、東側と西側にボルチコを増設することを許可する。これは、東西両ファサードが、建築家モンフェランの案に全くなかった、同様に必要な壮麗さを得るためである」。また、その案は、「華麗さ、壮大さ」を持ち、「配置において快適で」、「とりわけ、構造において堅牢」であらねばならない。ただし、旧聖堂は費用を節約するためになるべく残すように命じた。⁽⁴⁴⁾こうしてモンフェランの案を尊重し、旧聖堂を極力残すことを命じる一方で、

壮麗さ、美的調和、構造の堅牢さを確保するために、東西両ファサードへのポルチコの増設と必要な改良を行うように命じた。また、この日、アレクサンドルはアンドレイ・ミハイロフの案に印をつけた。⁽⁴⁶⁾

一八二四年六月四日、同委員会は次の四点で合意した。第一に、皇帝が希望する「配置における壮大さ、快適さと建築の堅牢さ」を実現するために、正方形を利用する。第二に、皇帝が命じた東と西のポルチコは、北と南のポルチコの形と調和させる。第三に、ポルチコは現在の八本の柱を維持する。第四として、同委員会は、アレクサンドルの指示に反して、旧聖堂は壊すべきであると結論した。⁽⁴⁷⁾

モンフェランは、アンドレイ・ミハイロフとスターツォフの考えを中心に、同委員会の諸案を大幅に取り入れて、自分の修正案を提出した。その案がアレクサンドル一世に一八二五年三月九日に提出され、四月初めに承認された。一八二五年の建設委員会の建築家への指示によれば、旧聖堂は一部残された。⁽⁴⁸⁾ 旧聖堂を壊すというアカデミーの特別委員会の考えは取り入れられなかった。

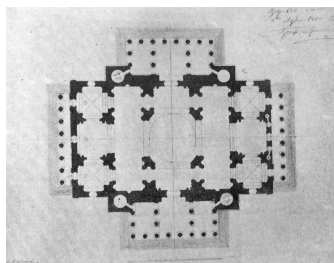


図9 モンフェラン、聖イサアク大聖堂平面図、1825年。Там же. С. 93.

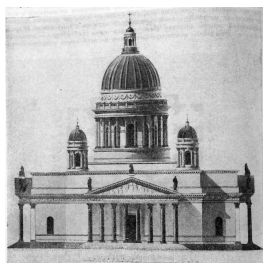


図10 同、聖イサアク大聖堂外観図、1825年。Там же. С. 94.

この一八二五年案(図9、10)は一八一八年の第一案よりも同第二案に近いが、それでも大幅に異なっている。八本の柱を持ち、東と西のファサードにもポルチコが出現した。長方形の平面図は東西に引き延ばされ、ギリシャ十字形とはいえるものの、東西の軸線が長くなった。北と南のファサードの中央に、ギリシャ十字の交差部分に当たる正方形が出っ張り、東と西のファサードでは、この正方形が聖堂の

輪郭を形成する。⁽⁴⁹⁾

従来のように中央ドームの脇に中央ドームから離れて

大きいドームを置くのではなく、中央ドームの近く、中央の正方形の四隅の出っ張りに、かなり小さい鐘楼を置いた。ロトンダ風鼓胴部を伴う中央ドーム塔は少し背が高くなり、全体的に軽快になった。ファサードは、台座の端とドームの十字架の頂上を結ぶ線が鐘楼の十字架の頂上を通るなど、ピラミッド型が意識されている。ポルチコの上の彫刻が、軽さを保ったまま、ピラミッド型を補足する⁽³⁰⁾。また、暗い色も用いるようになり、コントラストがついた⁽³¹⁾。計画は一八一八年案よりも壮大かつ優雅で、洗練されたものとなった。色彩によるコントラストは新古典主義的ではないものの、全体的に新古典主義の聖堂といえる。

構造は一八一八年案よりも安定した。ドームを支えるロトンダ風の鼓胴部の主要部分は、中央の四本の中柱が支えるようになり、鼓胴部の主要部分は、平面図中央の正方形に入った。ただし、鼓胴部の立柱はいまだ脇のヴォールトの上に載っていた⁽³²⁾。なお、同案が承認された際に聖堂の細部はまだ決定していなかった。以降、モンフェランは当初よりも影響力を強めたといわれる⁽³³⁾。

三・ニコライ一世治世の聖イサアク大聖堂

ニコライ一世治世のはじめに、審議体制が変更になった。モンフェランの図面細部の検討を任されていたアカデミーの委員会は、建設委員会の監視下に置かれた。さらに、ニコライは一八二六年五月二二日にアカデミーの委員会を廃止し、それに代わって、建設委員会に付属する諮問機関として、美術及び建設会議を設置した。アカデミーの建築家三名、道路通信局のエンジニアないし建築部門の官吏三名、他の部局の建築家ないし石工三名から成る⁽³⁴⁾。ニコライに近い立場の役人とエンジニアから成る建設委員会と、アカデミーの建築家たちとの間に意見の相違が存在していたことを窺わせる。

一八二五年の案が承認された後も図面の変更が重ねられた。その背景として、そのような関係者間の意見の相違や対立のほか、ニキチンはニコライ一世の介入を重視した⁽³⁵⁾。

たしかに、彼の即位後、様々なことが変わった。図面に限れば、一八三五年にいま一度改変された(図11、

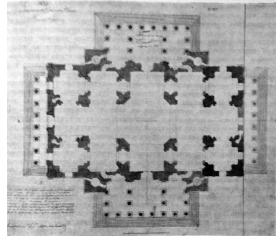


図11 モンフェラン、聖イサク大聖堂平面図、1835年 Там же. C. 121.

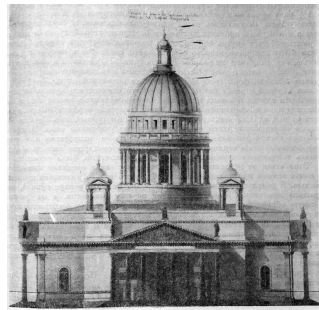


図12 同、聖イサク大聖堂外観図 1835年 Там же. C. 123.

12)。南北のボルチコに二個の壁龕（ニッチ）が設けられた。この変更により、装飾が増え、単純さが後退し、南北のボルチコは洗練された風貌を減じた。また、小さい丸屋根を載っていた周辺の四基の鐘楼が、各角の二本の円柱とペディメント、正方形の平面図を持つ古典的バヴイリオン風に変わった。中央ドームの上に乗るランタンの形がこの脇の鐘楼に合わせて変更された。⁽⁵⁶⁾ これにより、脇の鐘楼とランタンは中央ドームとの関係性を失った。ドームが周囲との調和を失ったことと、直方体が以前よりも重々しくなったことにより、直方体の水平性が強調され、ドームへ向かう垂直性と競い合うようになっ

た。また、直方体の高さに対して、もともと、アティック（直方体上部）も、ドーム鼓動部も高さがありすぎたが、⁽⁵⁷⁾ 不調和により、それらが目立つようになった。

一八三七年に建築委員会は、建物のヴォールトが中央ドームの鼓胴部付近まで積み上がりつつある段階で、すなわち、ドームの鼓胴部を形成する間に、中央ドームの鼓動部を囲む列柱を支えるヴォールトをようやく強化した。⁽⁵⁸⁾

一八三八年には、同委員会は中央ドームの上のランタンを再び変更することを決定し、スターソフ、シュタウベルク、アレクサンドル・ブリュエロフ、⁽⁵⁹⁾ 後述するコンスタンティン・トーンに設計を任せた。彼らはランタンを八角体にすることを決定し、一八三八年一月四日に図面が承認されたが、意匠が過剰なものであった。ドームの建設が進んだ後、一八三九年三月四日に図面は再度変更され、意匠の過剰は後退した。⁽⁶⁰⁾ ランタンはドームと異なり八角体である点には変わりなかったものの、ドームとの形状的関連性を持つようになった。

この一八三九年の承認をもって、大聖堂の構造と外観は決定した。一八四二年には、ブロンズのティンパム（ペディメントの外枠の内側）と彫像、浮彫、細かい装飾を除いて、外観は大方完成した。⁽⁸⁾ただし、その後も変更があった。中でも、直方体の窓枠の装飾が一八五〇年に変更された。元々は両脇のコリント式の二本の柱が三角形のペディメントを支える新古典主義的な窓であったが、コリント式の二本の柱の上に渦巻きを置く装飾的な窓枠に変わった。⁽⁹⁾

こうして、ニコライ一世の治世に計画は二転三転した。建設の混乱を招いたことは想像に難くないが、彼が一旦承認した意匠を変更することは、彼の強い介入なしには不可能である。聖堂は新古典主義から出発した。しかし、その建築的要素だけを見ても、ポルチコやドームがある一方で、ファサードは装飾が多くなり、全体的な統合性は失われ、新古典主義の簡素で統一された美しさは後退した。⁽¹⁰⁾

ニコライはすでに見たように、スターソフの全近衛連隊とイズマイロフ連隊の聖堂にはほとんど介入しなかつ



図13 聖イサアク大聖堂20世紀初頭
Никитин. Указ. соч. С. 28.

考えられる。そもそもピョートルが建てた聖堂であるということのほかに、この聖堂が面した元老院広場は、ニコライが即位した直後の一八二五年一月一四日に、将校によるデカブリストの乱に見舞われた正にその場所である。それが彼の特別な関心を惹いたとしても当然であろう。

聖堂はニコライ一世の没後、一八五八年五月三〇日に完成した（図13）。色彩や彫刻を含めて完成した大聖堂の全体的な姿を改めて描いておく。

ゴージェイエはこの聖堂について、ヴァチカンのサン

た。前者はミハイル大公に任せていたこと、両聖堂とも治世初期に設計図が完成していたことも理由である。うが、聖イサアク大聖堂は特に重要なものであったと

ピエトロ大聖堂、ローマのパンテオン、ロンドンのセントポール大聖堂、パリのパンテオン、アンヴァリッド（二六七〇～七九年）を彷彿とさせると述べた。モンフェラン自身は、「ロンドンのセントポール大聖堂を除いて、完璧な堅牢さを与える、ドームを持った大建築を私は知らない」と一八四五年に記した。一方、コリント式ポルチコと飾り気のない壁には、パリのパンテオンの影響を見ることが出来る。⁶⁴

平面図はギリシャ十字形である。水平に広がる直方体を成す主要部分は、暗い大理石から成り、重厚な雰囲気を持つ。ポルチコは、フィンランド産の暗いピンク色の花崗岩により作られた重厚な四八本のコリント式の柱から成り、壁龕を伴う。ドームを支えるロトンダ状の鼓胴部には、黄褐色の壁を背景として、ブロンズの柱頭と土台を持つポルチコ同様のコリント式の花崗岩の柱が二本並ぶ。この上に欄干を持つ低い円柱が載り、その上の金色の巨大なドームの表面には二四本のリブが通り、小さい円柱を持つ八角形のランタンへ向かう。ランタンは十字架を戴く。中央の正方形の四隅には、小さい金色の

丸屋根を持ち、中央ドームの形状と異なる古典的パヴィリオン風の小さい四基の鐘楼が載る。⁶⁵

新古典主義以外の要素が入り込み、統一性に欠けることが確認できる。さらに、色調が暗く、直方体もドームも重々しい。一八二五年の壮大だが華麗な雰囲気は失われた。

ドームは当時ヨーロッパで最大のものの一つであった。たしかに、脇の四基の鐘楼の小ささとのコントラストにより、ドームの巨大さと重要性が強調され、また、鐘楼は直方体から鼓動部、ドームへの視線の流れをスムーズにしたという側面はある。しかしながら、ドームはこれら四隅の鐘楼と統一されていない。部分的な調和を指摘したブティックとフヴォストヴァもまた、各部分の全体的な均衡はとれていないと認める。全体として、新古典主義に特有の厳しい比率よりも、巨大であることが優先された。⁶⁶意匠の不統一と重々しさにより、ドームやアティックの高さが直方体の高さ比べて高いことが目立ち、何より、垂直性と水平性の対抗と不調和が強調されている。



図14 聖イサク大聖堂北側ボルチコのペディメント 2019年夏筆者撮影

外壁の彫刻が、大聖

堂の印象や意味にとって重要な役割を果たすようになった。最も目立つ浮彫は、ボルチコの大きなペディメントのものである。西には「ダルマチアのイサクが皇帝テオドシウス

彫は扉にも施された。

丸彫は、ペディメントの上に使徒像、ペディメントの頂点に福音伝道者像、直方体の四隅には、灯明を持ち跪くブロンズの天使像が置かれた。この天使像は聖堂の横の広がり、水平性を強調した。一方、ドーム鼓胴部の上に位置する欄干には二四の天使の像が載り、鼓胴部立柱の垂直性を強調した。こうして彫像によって、建築自体ですでに強調されていた水平性と垂直性の対抗性が一層増した。

を祝福する」、北には「キリストの復活」(図14)、南には「東方三博士の礼拝」、東には「ダルマチアのイサクの、皇帝ヴァレンティンとの遭遇」の浮彫が刻まれた。⁽⁶⁷⁾ボルチコの壁龕の浮彫は、訪れる者にとつてもっとも近い彫刻である。北には「十字架を運ぶキリスト」

これらの彫刻は、ギリシャ・ローマ風ではなく、現実の衣装をまとう写実的描写が多い。⁽⁶⁸⁾そもそも新古典主義の聖堂に浮彫や丸彫はこのようにあふれていない。パリのパンテオンではボルチコのペディメントに群像が刻まれたが、静かな像である。しかし、聖イサク大聖堂では非常に動的な浮彫が彫られた。

「キリストの哀悼」、南には「ヘロデ王による」幼児虐殺、「羊飼いの天使の出現」の浮彫が刻まれた。北側がバルト貴族のピョートル・クロット、南側がアレクサンドル・ロガノフスキーによる。⁽⁶⁹⁾ロガノフスキーは救世主ハリストス大聖堂の外壁の彫刻も手がけている。浮

全体の重厚さや立像の多さはルネサンス様式を想起させる。こうして建築的意匠、色彩、彫刻、いずれにおいても、新古典主義以外の要素が大幅に入り込み、厳密な全体的均衡と統合性、簡潔さを失った。新古典主義を基

本とするといえるものの、きわめて折衷主義的である。⁽⁷⁰⁾

内部は、大理石と斑岩、ラピスラズリ、マラカイト、ブロンズ、精妙なモザイクと彫刻、アカデミー会員による約二〇〇の肖像画によって装飾された。装飾過剰の傾向は内部においてさらに顕著である。⁽⁷¹⁾

ニコライ一世の抑圧的政策との関係はすでに指摘される⁽⁷²⁾ところである。たしかに、権威で圧倒するような建物であり、デカブリストの乱が勃発した元老院広場にあることが、なおさらその傾向を感じさせる。

四. ニコライ一世によるロシア「ビザンツ様式」の推進

ニコライ一世が即位した時すでに、聖イサアク大聖堂は土台の施工が始まっており、平面図の大幅な変更は行われなかったものの、彼の介入下で、計画は折衷主義へ大きく接近した。イズマイロフ連隊三位一体大聖堂に関しては、屋根の色をロシア風にする方向で介入した。しかし、多くの教会では、彼はより明確に前治世との違いを明らかにした。彼の治世の教会建築の主流は、折衷主義の一つ、ネオ＝ロシア様式の中でもコンスタンティ

ン・トーンが中心に設計し、当時「ビザンツ様式」と呼ばれたロシア「ビザンツ様式」である。ニコライはその最大の推進者であった。最初のこの様式の教会は、トーンが一八三〇年に設計した聖エカテリーナ聖堂 Церковь св. муч. Евдeрины (一八三一―三七年、一九二九年破壊) である。

一八二七年末から二八年初めにかけて、同聖堂建築案についての設計競技が行われた。建設場所は、フォンタシカ川にかかるカリンキン橋(現旧カリンキン橋)と、一八三四年までに首都の境界線となるオブヴォド運河の手前にあたりフリヤンツキエ門(旧凱旋門、リナルデイ建築、一七七四―八四年)との中間であり、ペテルゴフ大通り(現旧ペテルゴフ大通り)に面する。さらに南へ一キロ下ると、一八一四年にナポレオン戦争からの凱旋のためにクアレングにより木造で建設され、スターツフにより石造での建設が始まっていた新古典主義のナルヴァ凱旋門(一八二七―三四年)に至る。聖堂周辺は当時、木造家屋と野原、野菜畑が多かったものの、西方から帝都に入る道沿いにあるという点で重要な場所であっ

た。⁶⁶⁾

設計案の決定は難航していた。スターソフは設計競技に招かれたが参加せず、メーリニコフとアンドレイ・ミハイロフが参加した。ニコライ一世は高額な建築費用とデザインを理由に、両者の案を認めなかった。両案は新古典主義によっていた。⁶⁷⁾ 再度の選考が行われ、メーリニコフは三案を提出し、そこに次のように記した。この教会の建築様式に関する「陛下の希望が不明なため」三案を提出した。すなわち、第一に「ビザンツ様式での古ロシア風」、第二に「最新モード、ギリシャ・ロシア教会に採用された古代ローマ建築様式」、第三に「パントオンに似た古代ローマ建築風」である。⁶⁸⁾ すなわち第一案はロシア・ビザンツ様式である。ただし、ポリソヴァによれば、「ビザンツ様式」の語は、後に書き込まれたものである。⁶⁹⁾ ビザンツ様式という用語が当初からのものではないことを示唆する。第二案はスターソフ風、第三案は新古典主義であろう。ニコライが旧来の新古典主義ではないもの、ロシア風を求めている可能性はすでに知られていたことがわかる。しかし、結局、決まらなかった。

一八三〇年に、既出の美術アカデミー総裁アレクセイ・オレーニンが、聖エカテリーナ聖堂を管轄する教区司祭に、同聖堂の設計者としてコンスタンティン・トーンを紹介した。⁷⁰⁾ オレーニンは、その際、トーンに教会のモデルを示した。ウラジーミル、ユーリエフ・ポリスキー、プスコフ、ニジニノヴゴロドなど古いロシアの諸都市で画家Ф・Г・ソルンツェフが写生した正教会聖堂の線描画である。トーン自身、イタリヤから帰国後、一八二九年から三〇年にかけてモスクワを訪れていた。⁷¹⁾

彼のデザインはニコライ一世の心をつかんだ。ニコライは案のすばらしさと、「古い様式で」作成されたことをアカデミーの建築家たちに周知させた。トーンは一八三〇年にアカデミー会員となり、翌年、ツァールスコエ・セローの聖堂を設計した際にニコライに謁見した。⁷²⁾ この時期、アレクサンドル治世にヴィトベルクが設計した救世主ハリストス大聖堂は、建築地さえ問題視され、同治世の一八二五年に建設はすでに中断していた。ニコライは聖書協会の活動を停止するなど、アレクサンドルのキリスト教普遍主義を完全に退けたが、ヴィトベ

ルクの計画も一八二七年に最終的に破棄した⁽⁸⁰⁾。設計競技が行われ、一八三二年にトーンが勝利した。一八三八年に起工式が行われ、クレムリンに近いペールイ・ゴロドで建築が始まった。

聖エカテリーナ聖堂とハリストス大聖堂は、白い立方体と、五基の玉葱型丸屋根塔を持ち、新古典主義を土台としながら、一五世紀モスクワ・クレムリンのウスペンスキー大聖堂を主なモデルとする折衷主義である。金色の丸屋根が載るハリストス大聖堂は非常に巨大で、さらに、建築自体だけでなく外壁の多くの浮彫により、ナポレオン戦争における勝利が正教会とその信仰に負うことを強調した⁽⁸¹⁾。

すでに一八二八年二月一日にニコライ一世は、「正教会の必要と慣習にしかるべく対応した、最良にして主に古い教会建築の典型」にしたがって教会建築の図面集を制作することを承認していた。ハリストス大聖堂と、やはりトーンが設計した大クレムリン宮殿が起工式を迎えた一八三八年にこの図面集がトーンによって出版され、ニコライ一世に捧げられた。ハリストス大聖堂や聖

エカテリーナ聖堂など五基の玉葱型丸屋根塔を持つ聖堂を中心に図面が掲載された。トーンはここで、「ビザンツ様式」は古い時代にロシアでその民族性とともにも生まれたものであると記した⁽⁸²⁾。とはいえ、彼の様式は新古典主義を土台とする折衷主義であり、ビザンツ帝国はもとより、モデルとした一七世紀までのロシアの建築とも異なる⁽⁸³⁾。

ニコライ一世は一八四二年三月二五日に、「正教会の建設案の作成に際して、優先的にかつ可能な限り、古ビザンツ建築風が維持されるべき」であると命じ、トーンのこの図面集を模範とするように指示した⁽⁸⁴⁾。また、同三月二七日の法令では、老朽化、焼失による村の聖堂の再建および増築に際して、特に「古ビザンツ様式を遵守して」設計することを定めた⁽⁸⁵⁾。つまりは、「ビザンツ様式」が正教会の建築の範としておおよげに推進されたのである。

一八四四年にトーンは追加の図面集を出版した。ここで五基の尖塔を持つ型が出現した⁽⁸⁶⁾。この一八四四年の図面集は全ての大主教管区に配布された。前述の一八四一

年の法令の影響もあり、彼の図面は帝国中に広がった。一九世紀中葉に最も人気があったのは、救世主ハリストス大聖堂と、小規模では聖エカテリーナ聖堂の型である。これは一九世紀中葉から後半にかけて、帝国の様々な都市の中心部に現れ、修道院でも再建や拡張に際して用いられ、ランドマークとなった。このモデルは勢いを失ってもなお、一九世紀を通じて一つのモデルでありつづけた。五尖塔型は郡や村で採用された。一塔のタイプは村に多かった。⁽⁸⁾「ビザンツ様式」の採用は、ニコライ一世の強い意志によっていた。

五. むすび

ニコライ一世は、自ら積極的に折衷主義を建築で実践した。それはとりわけロシア・ビザンツ様式で顕著であるが、モンフェランが設計した聖イサアク大聖堂に関しても大きな変化があった。同聖堂は、アレクサンドル一世の治世下に新古典主義で壮大だが華麗な聖堂として計画されていたが、ニコライ一世の介入下で図面のバランスや意匠、装飾が大幅に変化し、折衷主義に強く傾斜し

た。彼は教会建築において、可能な限りで、ロシア・ビザンツ様式を筆頭に折衷主義を推進したということである。また、トーンのロシア・ビザンツ様式の設計にはオレーニンの後押しがあった。アレクサンドル一世からニコライ一世への建築の変化は、両者の個人的好みを越えて、政治的文化的な時代の大きなうねりを背景としているはずである。この点は別の機会に論じたい。

注

- (1) Théophile Gautier, *Voyage en Russie*, T. 1, Paris, 1867, p. 315.
- (2) コーティエは、一八五八年と六一年に訪露した。Михайлов А. Л. «Предисловие» // Горьке Т. (Пер. с франц. и коммент. Н. В. Шапошниковой), *Путешествие в Россию*, М., 1988, С. 12.
- (3) 現在のアレクサンドロフスキー庭園は一八七二〜七四年に造園された。
- (4) Бутиков Г. П., Хвостова Г. А. *Исаакиевский собор*, М., 1974, С. 70; Чеканова О. А. М., Ротач А. Л. *Отюст Монферран*, Л., 1990, С. 58; Фомин, Иван. «Николаевский классицизм» // Игорь Грабарь. *Петербургская*

архитектура в XVIII и XIX веках. СПб., 1994. С. 367, 376, 378. カロリーヌ・エラム (河辺泰宏訳) 『ロシア・オスマン・トルコ』、タン・クリュック・シャント編 (飯田喜四郎監訳) 『フレンチャール図説世界建築の歴史大事典』第三三章、西村書店、二〇一二年、一―四四頁。Shvidkovsky, Dmitry (trans. Antony Wood), *Russian Architecture and the West*, New Haven & London, 2007, p. 314; Brumfield, William Craft, *A History of Russian Architecture*, Seattle, WA., 2004, pp. 399-401.

(45) Fedorov, Sergey G. "Early Iron Domed Roofs in Russian Church Architecture: 1800-1840", *Construction History*, Vol. 12, 1996, pp. 52-53; Hamilton, George Heard, *The Art and Architecture of Russia*, 3rd ed., New Haven & London, 1983, pp. 331-332; Фотин. Указ соч. С. 376, 378.

(6) 後期バロック (エリザヴェータ・バロック) のスモリーヌイ大聖堂 Воскресенский всех учебных заведений Смоленский собор (フランチェスコ・ラストレツリ) ヌニコライ海軍大聖堂 Морской собор святителя Николая Чудотворца и Богоявления (一七五三―六二年)。サツヴァ・チエヴァキンスキー) は、玉葱型のキューポラなど一七世紀までのロシアの聖堂の要素を持つものの、圧倒的にバロックである。Brumfield, op. cit., pp. 220-222, 253-254;

Михайлов А. «Горчество Распрегли и традиции русской архитектуры (на истории создания Смоленского монастыря)» // *Архитектурное наследие*. М., 1951. № 1. С. 64-65.

(7) ブェー・オナー (白井秀和訳) 『新古典主義』、中央公論美術出版、一九九六年、二一―二二、二四―二五、二三―二四頁。

(8) Brumfield, op. cit., pp. 210-211, 275-276; Hamilton, op. cit., pp. 267, 272, 301-302, 326.

(9) Brumfield, op. cit., p. 349. 々の他、一八世紀末からアレクサンデル二世治世にかけてペテルブルクに建設されたものとして、フォードル・デメルツォフ設計のズナメンスカヤ聖堂 Знаменская церковь (Церковь во имя Входа Господня во Иерусалим) (一七九四―一八〇四年。現峰起広場、一九四一年破壊) がある。五基のドーム塔を持つ。新古典主義様式でドーム塔を五基持つのは、この聖堂が初めてである。Жерихина Е. И. *Александровский амбир*. СПб., 2020. С. 12.

(10) 本文に掲載したものの以外では、管見の限り、ペテルブルクでは、ミハイロフ (兄乃至弟) による聖エカテリーーナ聖堂 Церковь святой великомученицы Екатерины (一八一―一三三年、ヴァシーリエフスキー島) / ルイジ・ルスカによ

る聖母聖堂 *Церковь иконы Божией Матери «Всех скорбящих Радость»* (一八一七～一八八年、ネヴァ川左岸) / ザハロフによる聖バヴロ聖堂 *Церковь святого апостола Павла при Обуховском сталелитейном заводе* (一八〇四～二六六年。一九二八年閉鎖、アレクサンドロフ村 (ネヴァ川左岸、郊外)、モスクワではクリシキ (ペールイ・コロド東部) の聖母生誕祭 (生神女誕生祭) 聖堂 *Храм Рождества Пресвятой Богородицы на Кулишках (на Стрелке)* (一八〇一～〇四年) / ザモスクヴォレチエ (モスクワ川右岸セムリヤノイ・ゴロド東部) の三位一体聖堂 *Храм Троицы Живоначальной в Вишняках* (一八〇四～一一年) / キタイコロドの聖ヨハネ聖堂 *Церковь святого апостола Иоанна Богослова под Вязом* (一八二五～二七年) を数えるに¹⁰。Магиновский А. Ф. (сост. С. Р. Долгова). *Обзорение Москвы*. М., 1992 (1820). С.174; Турчин, Валерий С. *Александр и неоклассицизм в России*. *Стиль империи или империя как стиль*. М., 2001. С. 328, 336; Жерихина Указ соч. С. 12.

(11) スコットランド人。バヴロフスタ宮殿など。

(12) 一八二七年に増築によりラテン十字形から長方形に変わった。Амиханов, Леонид. *Кронштадт. Город крепость. От основания до наших дней*. Litres (digital), 2018. С.

197-199; *Кронштадтский Андреевский собор*. 1817-1892. 1892. 26-го августа. Кронштадт, 1892. С. 5-10; Тимофеевский Ф. А. *Краткий исторический очерк двухсотлетия города Кронштадта*. Кронштадт, 1913. С. 66-69.

(13) Казанский в честь Казанской иконы Божией Матери собор на Красной площади в Москве // *Православная энциклопедия*. Т. 29. (Электронная версия: <https://www.pravenc.ru/text/1319816.html>) カザン大聖堂 (モスクワ) は一九三六年に破壊され、一九九三年に一七世紀の形で再建された。

(14) 後にアレクセイ・バカレフが引き継ぎ、ネオロコシック様式とした (一八〇九～一七年)。

(15) 拙稿、「救世主ハリストス大聖堂と二人の皇帝 —アレクサンデル一世とニコライ一世」『大東史学』第二号、二〇二〇年、四四、四六～四七頁。

(16) 同、三九～四七、五〇～五一頁。

(17) 一八三〇年代にノーヴィ・ペテルゴフの開発に関わった。

(18) *Предупомление // Собрание планов, фасадов и профилей для строения каменных церквей с круглым наставлением как о самом производстве строения, так и о вычтении погребных к тому материалов*: при чем

- приложены и объяснительные чертежи важнейших частей здания, со значением размера оных для практического употребления. По высочайшему Ею Императорского Величества повелению. Министрства внутренних дел от Департамента государственного хозяйства и публичных зданий изданное. СПб.: Типография Медицинского департамента Министрства внутренних дел. 1824 г.
- (19) Гызженко. Т. Е. *Василий Стасов*. Л., 1990, С. 101; *Намилон*, ор. сит., р. 326.
- (20) Немиров Г. А. *Троицкий собор, что на Петербургской стороне, в 1703—1903 гг.* СПб., 1905, С. 212—213; Гызженко. Указ соч. С. 106—107.
- (21) *Wrightfield*, ор. сит., pp. 371—372; *Намилон*, ор. сит., р. 326.
- (22) Гызженко. Указ соч. С. 109, 110. その後一八三四年二月二三日の暴風でドームが破壊され、再建案はビエール・パゼーヌに任された。
- (23) イタリア人。大理石宮殿を設計した。
- (24) 元の場所には、一七八二年にビョートル一世の騎馬像が建てられた。
- (25) イタリア人。ミハイロフスキー城などを設計した。
- (26) *Серафимов В. Описание Исаакиевского собора в С-*

- Петербургe, составленное по официальноным документам: С приложением четырех рисунков собора, плана его и портрета архитектора де-Монтферранда, литографированных на камне.* СПб.: Типография Комиссионера Императорской академии художеств Гоенфельдена и К^о, 1865, 2-4В, 6-7В, С. 16.
- (27) Чеканова, Рогач. Указ соч. С. 24.
- (28) *Серафимов*. Указ соч. С. 9.
- (29) イタリア人。エルミタージュ劇場、ツァールスコエ・セローのアレクサンドロフスキー宮殿ほか。
- (30) スイス人。ネフスキー大通りとペリンナヤ小路のポルチコなど。
- (31) スペイン人。スペインのナポレオンとの戦争に伴い、一八〇八年からロシア勤務し、工科大学の設置のほか、多くの公共事業を手がけた。
- (32) フランス人。ホテルブルク中心部の広場を設計した。
- (33) ナポレオンがアレクサンドルに送ったエンジニア。オプヴォド運河建設を指揮した。
- (34) Чеканова, Рогач. Указ соч. С. 17, 25; *Серафимов*. Указ соч. С. 9, 16.
- (35) この日付のみ西暦（露暦八〇九日）
- (36) Чеканова, Рогач. Указ соч. С. 14, 16—17, 19; *Wrightfield*,

- or. cit., pp. 399–400.
- (25) Auguste Ricard de Montferand, *Église cathédrale de Saint-Isaac: description architecturale, pittoresque et historique de ce monument*, SPB, 1845, p. 10. Cf. Чеканова, Рогач. Указ соч. С. 20; Никитин Н. П. *Отчет Монферан. Проектирование и строительство Исакиевского собора и Александровской колонны* / Под ред. В. В. Попова. Л., 1939. С. 29; Чеканова, Рогач. Указ соч. С. 20, 27; Никитин. Указ соч. С. 29–30.
- (26) Никитин. Указ соч. С. 31–35, Рис. 11, 12, 14–15.
- (27) Namilton, op. cit., pp. 331–332; Никитин. Указ соч. С. 37.
- (28) Чеканова, Рогач. Указ соч. С. 30, 196–197; Никитин. Указ соч. С. 51–52; Серафимов. Указ соч. С. 17–18. 70С
委員会は長期にわたり、メンバーも変化していった。Montferand, op. cit., pp. 21–22.
- (29) スタントールは一八一七年にニジニイノヴロトに赴任し、ホテルブルクと往復していった。
- (30) ニコライ聖堂 (Никольская единоверческая церковь (Фоонтанка川の外、現国立北極南極博物館) を設計した。
- (31) Серафимов. Указ соч. С. 18–19; Montferand, op. cit., pp. 22–23.
- (32) Чеканова, Рогач. Указ соч. С. 36, 37.
- (33) Журнал комитета для рассмотрения замечаний архитектора Молки на строительные работы Исакиевского собора. 11 февраля 1824 года // Никитин. Указ соч. С. 312–313. Монтехраннは後年著作で、鐘楼四基をエーム脇の立方体に載せ、東西面ファサードにポルチコを設ける指示はニコライ一世のものであったと記した。同時代人のセラフィーモフと、研究者のハミルトンもその見解を採用したが、本稿に述べたように、それはアレクサンデル一世期の指示でもある。Montferand, op. cit., pp. 10–11; Серафимов. Указ соч. С. 20; Namilton, op. cit., p. 332.
- (34) Чеканова, Рогач. Указ соч. С. 41–42; Никитин. Указ соч. С. 96–97.
- (35) Журнал комитета для рассмотрения замечаний... 4 июня 1824 года // Никитин. Указ соч. С. 313–314.
- (36) Чеканова, Рогач. Указ соч. С. 41–42; Никитин. Указ соч. С. 96–97; Brumfield, op. cit., p. 400; Инструкция, данная из комиссии о построении Исакиевского собора г. г. архитектором, при построении оного состоящим на занятиях в сем 1825 году, по следующим четырём главным предметам // Никитин. Указ соч. С. 320.
- (37) Никитин. Указ соч. С. 96–99, Рис. 56–57.
- (38) Там же. С. 93–95, 99–100, Рис. 56–58.

- (15) Там же, С. 94, Рис. 57.
- (16) Там же. С. 96–99, Рис. 59.
- (17) Черанова, Рогач. Указ соч. С. 43.
- (18) Никитин. Указ. соч. С. 101–103; Серафимов. Указ. соч. С. 19–20.
- (19) Никитин. Указ. соч. С. 112–114
- (20) Там же. С. 118–119, 121, 123. Рис. 73–74.
- (21) Там же. С. 94. Рис. 57.
- (22) Там же. С. 119–120.
- (23) ノンノの家系。聖ニコロ＝ンザロ・ルーテル教会 (ネフスキー大通り) など。
- (24) Никитин. Указ. соч. С. 128–129, 132. Рис. 80–81.
- (25) Там же. С. 132
- (26) Там же. С. 138–139, 135. Рис. 86.
- (27) Там же. С. 112; Намптон, ор. сит., р. 332; Врумфилд, ор. сит., р. 400; Фомина, Иван. Указ соч. С. 367, 378.
- (28) Gautier, ор. сит., р. 317; Montferand, ор. сит., р. 55; Shvidkovsky, ор. сит., pp. 314–317.
- (29) Намптон, ор. сит., pp. 331–332; Shvidkovsky, ор. сит., р. 317; Врумфилд, ор. сит., р. 400; Бутников, Хвостова. Указ соч. С. 72.
- (30) Fedorov, ор. сит., р. 53; Врумфилд, ор. сит., pp. 400–401;
- Бутников, Хвостова. Указ. соч. С. 71–72; Намптон, ор. сит., р. 332.
- (31) Бутников, Хвостова. Указ соч. С. 72; Намптон, ор. сит., pp. 331–332. イタリヤのイヴァン・サッターリントンスのフイリッパ・ルメールが手がけた。
- (32) Никитин. Указ. соч. С. 171; Бутников Хвостова. Указ соч. С. 74.
- (33) Montferand, ор. сит., pl. 47–52.
- (34) Никитин. Указ. соч. С. 112; Намптон, ор. сит., pp. 331–332; Врумфилд, ор. сит., pp. 400–401; Бутников, Хвостова. Указ соч. С. 71; Фомина, Иван. Указ соч. С. 367, 378.
- (35) Shvidkovsky, ор. сит., р. 317; Никитин. Указ. соч. С. 112.
- (36) Shvidkovsky, ор. сит., р. 317; Намптон, ор. сит., р. 331.
- (37) Лисовский Владимир. *Архитектура России XVIII – начала XX века. Поиск национального стиля*. М., 2009. С. 215; Славина, Татьяна Андреевна. *Константин Тон*. Л., 1989. С. 34.
- (38) Славина. Указ соч. С. 34–36.
- (39) Борисова, Елена Андреевна. *Русская архитектура второй половины XIX века*. М., 1979. С. 100 以下に 4^番。
- (40) Там же. С. 277, примечание № 42.

(77) Там же. С. 36.

(82) Солгнцев Ф. Г. «Моя жизнь и художественно-археологические труды. I» // *Русская старина*. 1876. № 3. С. 634–638; Главина. Указ соч. С. 107.

(82) Кирпиченко Е. И. «Образцовые проекты храмов» // Е. И. Кирпиченко и т. д. (ред.). *Градостроительство России середины XIX — начала XX века*. Книга 1. М., 2001 [2010]. Г. 5. С. 225; Главина. Указ соч. С. 36–37.

(80) 拙稿 (二〇一〇年) 一五二頁。

(81) 拙稿 (二〇一〇年) 一五〇～一五六頁。豊山禎「神々の感懐と英雄の顕彰 — 対ナホレオノ「祖国戦争」後のロクム」、若尾祐司、和田光弘編著『歴史の場 — 史跡・記念碑・記憶』『ネルヴァ書房』二〇一〇年 一七三—一九三頁。

(82) Кирпиченко. Образцовые проекты храмов... С. 222–223. の引用にちなむ。

(83) Тон К. А. Церквя, сочиненные архитектором Его Императорского Величества профессором архитектуры Императорской академии художеств и членом разных иностранных академий Константином Тоном. СПб., 1838.

(84) 拙稿 (二〇一〇年) 一五〇～一五六頁。

(85) *Свод законов Российской империи*. Т. 12. Ч. 1 (Уставы

путей сообщения, почтовый, телеграфический, строительный, и пожарный). 1857, СПб.: Тип. Второго отделения Собственной Е. И. В. канцелярии. IV (Учреждения и устав строительные). С. 49. Страница 218.

(86) Там же. С. 47–48. Страница 209.

(82) 拙稿「伝説的ロクム建築Δロクムスタンテン・ドーン」の「ウキナン様式」『大東紀要』第六〇号 二〇一二年参照。Тон. *Проекты церквей, сочиненные архитектором Его Императорского Величества профессором архитектуры Императорской академии художеств и членом разных иностранных академий Константином Тоном*. Дополнение. СПб. 1844.

(88) Берташ, А. В. «Стилистические особенности храмо­строительства в 1830–1870-е годы в России: столица и национальные окраины» *Вестник Санкт-Петербургского университета. Искусствоведение*. 2013. 3(1). С. 180–181, 183. (<https://artsjournal.spbu.ru/article/view/1672>); Кирпиченко. Образцовые проекты храмов... С. 228–229.